
[成果情報名] 作業性に優れたイチジク「蓬莱柿」の平棚H型整枝

[要約] イチジク「蓬莱柿」の平棚H型整枝は、切り返しせん定の平棚開心形と比較して、収穫や枝梢管理の作業性が著しく優れる。また、従来の間引きせん定の平棚開心形と比較し、収穫ピークが分散され収穫後半の収量が増加する。

[キーワード] イチジク、蓬莱柿、H型整枝、収穫労力

[担当部署] 豊前分場 果樹チーム

[連絡先] 0930-23-0163

[対象作目] イチジク [専門項目] 果樹 [成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

イチジク「蓬莱柿」は、これまで冬季に結果母枝を間引きせん定する平棚開心形で栽培するのが一般的で、労力面では8月下旬～9月上旬にかけて収穫が集中し、単価面でも出荷の集中により下落する傾向にあった。そのため、収穫ピーク分散のために、冬季に結果母枝を2芽で切り返す平棚開心形が導入されつつある。

しかし、平棚開心形では棚面に新梢が不規則に配置され、新梢管理や収穫労力がかかるため、より省力的な樹形を開発する。

[成果の内容・特徴]

- 1．主幹長1 m、結果枝間隔40cmで管理を行う平棚H型整枝（樹幹占有面積8 m × 4 m）を開発した（図1）。
- 2．樹形完成後の発芽期、展葉期、収穫開始期、10 a 当たり収量、果重、果実糖度は、切り返しせん定を行う平棚開心形と差がなく、果実着色は優れる（表1、一部データ略）。
- 3．平棚H型整枝は切り返しせん定を行う平棚開心形に比べ、1果当たりにかかる収穫時間と芽かきや新梢誘引など枝梢管理作業時間が短く、作業性が著しく優れる（表2）。
- 4．切り返しせん定を行う平棚開心形と同様に、収穫ピークの分散が図れる（図2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．普及栽培現場での栽培技術資料に活用できる。
- 2．新梢伸長が旺盛な場合は、7月下旬に15節程度で摘心する。
- 3．冬季に結果母枝を2芽で切り返すため、先端部に着生する夏果が収穫できなくなる。
- 4．同一園内に、平棚H型と従来の結果母枝を間引く平棚開心形を混在させることで、収穫労力の分散が可能である。
- 5．主枝の間隔が2 m必要である。

[具体的データ]

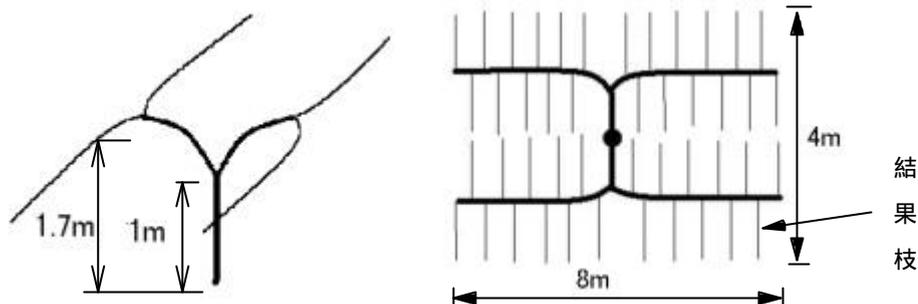


図1 「蓬萊柿」のH型整枝
注) 結果枝の間隔は片側40cm

表1 「蓬萊柿」における整枝法が収量および果実品質に及ぼす影響 (平成21年)

整枝法	一果重	着色割合	糖度	収量
	g	%	Brix	t / 10a
平棚 H 型	66.8	51	17.1	1.8
平棚開心形 (切り返し)	62.6	39	16.5	2.1
有意性	ns	*	ns	ns

注) 1. 樹齢は7年生、樹冠占有面積は平棚H型は32m² (8×4m)平棚開心形は49m² (7×7m)。10a当たり換算収量は1樹当たり収量×栽植本数とした。
2. *はt検定により5%の危険率で有意差あり、nsは有意差なし。

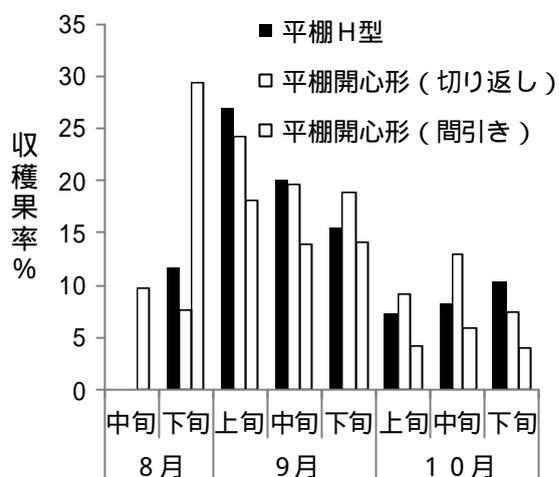


図2 整枝法が時期別収穫果率に及ぼす影響 (平成21年)

表2 「蓬萊柿」における整枝法が収穫と枝梢管理の作業性に及ぼす影響 (平成21年)

整枝法	1果当たりの収穫時間	10a当たり枝梢管理作業時間		
		芽かき	新梢誘引	剪定
	秒	時間	時間	時間
平棚 H 型	2.9	3.9	12.4	5.2
平棚開心形 (切り返し)	6.0	5.1	23.8	17.2

[その他]

研究課題名: 防疫・省力・高品質機能を合せ持つ革新的イチジク樹形の開発

予算区分: 国庫受託 (実用技術開発事業)

研究期間: 平成21年度 (平成19~21年)

研究担当者: 野方 仁、粟村光男、石橋正文